

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2014-145

(P2014-145A)

(43) 公開日 平成26年1月9日(2014.1.9)

(51) Int.Cl.	F 1	テーマコード (参考)
A 6 1 B 1/24 (2006.01)	A 6 1 B 1/24	2 H 0 4 2
G 0 2 B 5/08 (2006.01)	G 0 2 B 5/08	4 C 1 6 1

審査請求 未請求 請求項の数 6 O L (全 4 頁)

(21) 出願番号	特願2012-136051 (P2012-136051)	(71) 出願人	509231905
(22) 出願日	平成24年6月15日 (2012. 6. 15)		株式会社ホワイトベース
			愛知県名古屋市中村区名駅3-1-2 グ
			ランアベニュー906号
		(74) 代理人	100113664
			弁理士 森岡 正往
		(74) 代理人	110001324
			特許業務法人SANSUI国際特許事務所
		(72) 発明者	渡邊 崇
			愛知県名古屋市中村区名駅3-1-2 グ
			ランアベニュー906号 株式会社ホワイト
			ベース内
		Fターム(参考)	2H042 DA10 DA22 DB07
			4C161 AA09 CC01 HH51 WW12

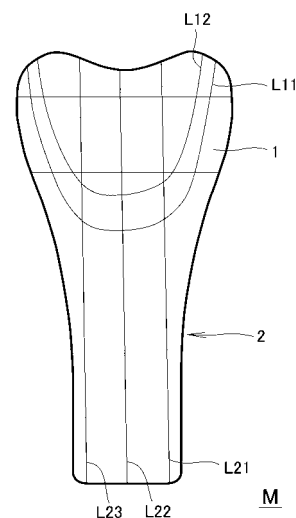
(54) 【発明の名称】 基準付鏡

(57) 【要約】

【課題】被写体の歪み等を瞬時に効率的に判断できる基準付鏡を提供する。

【解決手段】本発明の基準付鏡は、鏡面に基準が現れることを特徴とする。この基準付鏡と被写体の写像を鏡面上で対比することにより、被写体の歪みや程度等を効率的に精度よく判断できる。基準は、被写体に応じて適切な形態である基準線であると好ましい。また基準には目盛やスケールが付されていると好ましい。さらに基準は被写体とは異なる色彩からなると、その視認性が向上して好適である。基準付鏡自体は、その材質、形状、用途等は問わないが、例えば、その代表例として歯科矯正等に用いる金属製の口腔鏡がある。

【選択図】 図1



【特許請求の範囲】

【請求項 1】

鏡面に基準が現れることを特徴とする基準付鏡。

【請求項 2】

前記基準は基準線である請求項 1 に記載の基準付鏡。

【請求項 3】

前記基準線は、被写体の形態に基づき形成されている請求項 2 に記載の基準付鏡。

【請求項 4】

前記基準は、目盛を伴う請求項 1～3 のいずれかに記載の基準付鏡。

【請求項 5】

前記基準は、前記被写体と異なる色彩からなる請求項 1～4 のいずれかに記載の基準付鏡。

【請求項 6】

口腔鏡からなる請求項 1～5 のいずれかに記載の基準付鏡。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、顔や口腔内等を写し、それらに生じている歪みの判定等を行い易い基準付鏡に関する。

【背景技術】

【0002】

顔などを写して見る日常的な鏡の他、口腔内の検査等のために用いる口腔鏡や光学機器用鏡など、多様な分野で種々の鏡が用いられている。

【先行技術文献】

【特許文献】

【0003】

【特許文献 1】 実用新案登録第 3 1 4 9 1 4 3 号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0004】

もっとも、従来の鏡は、被写体の写像範囲、写像品質、利便性等に重点が置かれて開発されているだけだった。

【0005】

本発明はこのような事情に鑑みて為されたものであり、従来の鏡とは異なり、被写体に生じている歪みの有無や程度等を、その写像に基づき容易に判断できる基準付鏡を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0006】

本発明者はこの課題を解決すべく鋭意研究し、試行錯誤を重ねた結果、鏡面に目印となる基準を設けることを思いつき、この着想に基づき以降に述べる本発明を完成するに至った。

【0007】

すなわち本発明の基準付鏡は、鏡面に基準が現れることを特徴とする。

【0008】

この基準付鏡を用いれば、その使用者は被写体の写像と基準を鏡面上で同時に比較しながら観ることができる。これにより、被写体に関する様々な評価が容易となる。例えば、被写体に関する様々な位置評価、その特定方向（左右、上下など）に関する対称性評価、その適正形状からのズレ評価等、従来の鏡面上の写像だけでは判断できなかった被写体に関する種々の評価が的確に行えるようになる。具体例を挙げると、本発明の基準付鏡を用いることにより、体型の歪み、顔の歪み、口腔内の歪み（歯並び等）の有無やその程度等

10

20

30

40

50

を的確に知ることができ、各種異常の早期発見や治療等に役立てることが可能となる。

【図面の簡単な説明】

【0009】

【図1】本発明の一実施例であるデンタルミラーを示す正面図である。

【発明を実施するための形態】

【0010】

上述した本発明の構成要素に、本明細書中から任意に選択した一つまたは二つ以上の構成要素を付加し得る。いずれの実施形態が最良であるか否かは、対象、要求性能等によって異なる。

【0011】

《基準》

(1) 本発明に係る基準は、鏡面上に現れる少なくとも一つのマークでもよい。もっとも、複数のマークがあると、被写体の対称性や歪みの大きさなどを評価し易い。例えば、本発明に係る基準は、鏡の中心線の両端部に付された両マークからなると好ましい。上下端または左右端等に現れたマークを目測で連ねるだけでも、被写体の歪みの有無等を容易に評価できるようになる。

【0012】

本発明に係る基準は短い細線や矢印等の単なる目印でもよいが、それらが所定の間隔で配置された目盛（スケール）等を伴うとより好ましい。これにより被写体の歪みの有無は勿論、その程度も容易に評価できるようになる。さらに、線状の目盛だけではなく、適当な指標値が付されていると、一層、被写体の評価を客観的に言い易くなる。

【0013】

基準は、被写体の写像と区別し易いほど好ましく、例えば、被写体と異なる色彩からなると好適である。例えば、被写体が肌色や紅色なら、基準は青系、緑系または蛍光色等であるとよい。

【0014】

基準は被写体の写像と共に観察されれば足る。従って基準は、鏡面上にプリントしたもので、刻んだもので、シールを貼り付けたものでよい。また基準は鏡面の最表面でもよいし、鏡面が透明なガラスの最表面である場合はそのガラスの裏面側に基準が描かれていてもよい。

【0015】

(2) 基準を細い刻線としたり、基準を鏡面の端部等に配置することにより、基準により写像が観察し難くなる事態が抑制される。もっとも、基準を連続または断続した線状とすることにより、被写体の歪み等をより評価し易くなる。このような線状の基準を本明細書では基準線という。

【0016】

基準線は直線でも曲線でもそれらを組み合わせたものでよい。基準線は、単純な形態に限らず、本発明の基準付鏡の利用目的に応じて定まる被写体の形態に基づくとも好ましい。例えば、鏡面に口腔内を写す場合なら、基準線は適正な基準となる歯列に応じた形状であると好ましい。鏡面に顔面を写す場合なら、基準線は対称的な顔面の輪郭に応じた形状であると好ましい。このような基準線と写像を比較することにより被写体に生じている歪みの有無や程度等を瞬時に効率よく判断できる。

【0017】

この基準付鏡には、さらに目盛や指標値が付されていると、鏡面に写った被写体の歪みの程度などを定量的、客観的に判断できて好ましい。

【0018】

《鏡》

本発明の基準付鏡自体は、材質、製法、形状等を問わず、用途に応じた適切なものが選択されればよい。例えば、裏面に銀幕等を設けたガラス製鏡でも、表面を鏡面加工等して鏡面とした金属製鏡でもよい。また基準付鏡は、例えば、丸型、方形型等の他、用途に応

10

20

30

40

50

じて口腔内の形状等に応じたものでもよい。さらに本発明の基準付鏡は、定置型、携帯型等を問わないが、ハンディー型であると被写体の歪み等を観察し易い。

【0019】

本発明の基準付鏡は、前述したようにその用途を問わないが、歯科用の口腔鏡など代表例である。なお、本発明の基準付鏡は、鏡面部だけでもよいが、適宜、その鏡面部に連なる把持部（柄部分）を伴ってもよい。

【実施例】

【0020】

本発明の基準付鏡に係る一例である歯科矯正に用いるデンタルミラー（口腔鏡）Mを図1に示した。このデンタルミラーMは、口腔内に入れる口腔部1と、それに連なる把持部2とからなる。このデンタルミラーMは、ステンレス製からなり、その全表面が鏡面加工した鏡面となっている。

10

【0021】

口腔部1には歯列に沿った湾曲線L11、L12が描かれてあり、口腔部1および把持部2には縦方向に貫く平行で等間隔な直線L21、L22、L23が描かれてある。

【0022】

これら湾曲線L11、L12と直線L21、L22、L23が本発明でいう基準線に相当する。これら基準線は、デンタルミラーMの表面に青系の不滅インキでプリントされている。

【符号の説明】

20

【0023】

- M デンタルミラー
- L 基準線
- 1 口腔部
- 2 把持部

【図1】

